

先日、詩人の集まりに参加した。そのときの話の中に「事実や現実をそのまま書く人が多いが、詩は“喩”である。“喩”とは例えることであって、体験を他の言葉に置き換えることである」というものがあつた。確かに「自由詩」という名の現実羅列の「短文」は多いと思う。それは確かにつまらない。しかしどんな「喩」が良いのだろう。そんなふうを考えて家に帰ったとき、ポツと思ひ浮かんだのはカンツォーネの「Dio, come ti amo (愛は限りなく)」だった。思わぬ誤解から、今まさに飛行機に乗って遠くへ旅立とうとしている恋人へ向かって「あなたをどんなに愛していることか」と歌うその詩は、こんなふうが始まる。

Nel cielo passano le nuvole
che vanno verso il mare,
sembrano fazzoletti bianchi
che salutano il nostro amore

空を 雲が流れていく
それは海を越えていく
白いハンカチーフのように
私たちの愛に挨拶を送る

空を流れていく白い雲が、「さようなら」と振られて遠ざかってゆく白いハンカチーフに例えられているのだ。「なるほど、そうか!」と思った。歌詞も詩である。そういえば「Che sarā,(ケサラ)」も、以下のように「村」を「老人」に例えている。

Paese mio che stai sulla collina
Disteso come un vecchio addormentato

丘の上にある私の村は
活気のない老人のように横たわっていた

こんなふうと思ひ浮かべてみると、シャンソン・フランセーズにも同様の「喩」が見られる。『私の回転木馬』では恋人を回転木馬に例え、『私の心はヴァイオリン』では、自分を「ヴァイオリン」に、恋人を「弓」に例えている。『さくらんぼの実る頃』では、「さくらんぼ」は「耳飾り」に例えられている。そして「パリ」という街は完全に擬人化されている。さらに趣旨は違うが、シャンソン・フランセーズには公に言えないことを別の比喩でうまくカムフラージュする歌もある。それも意味「喩」の巧さだろう。因みに夏目漱石の『吾輩は猫である』も公に言えないことをユーモアの中に隠している。そこはフランス的かもしれない。

それはさておき、詩の「喩」であるが、考えてみると昔の歌、昔の詩のほうが表現力豊かで、現実から離れた世界へいざなってくれるような気がする。それには時代の変遷も関わっていると思う。現代日本で「別れにハンカチーフを振る」という情景は見られないし、「老人」という言葉が差別用語になるほど、年配者より若者の方に活気がない世の中だし、到底その方面に想像力は働かない。それに加えて最近では現実の悩みや教訓などを直截表現する心のケア的なものが増えたように思う。それというのも情報があり過ぎて、世の中が早く回り過ぎて「情緒」という空間に立ち止まることが少ないからではないか。我が身を省みれば、ただでさえ貧困な発想力が、「言われたことだけやればいい」的仕事環境で、ますます貧困になっていく。豊かな「喩」は与えられたことを受け入れるだけではなく、自ら学ぶことから始まる。(2014.10.28)